



大方あかつき館報

第34号
2021年3月発行

あかつき

■2020年度 第2回 上林暁文学講座

「上林暁全集を読む」

講師：山本善行（古書善行堂店主）



第2回文学講座は、上林暁傑作小説集「星を撒いた街」の撰者の山本善行さん大阪府出身、京都市在住（64）です。古本屋をしながら本の編集を手掛ける上

■2020年度 第1回 上林暁文学講座

「上林暁と映画」

講師：松田大佑（映画監督）



第1回文学講座（10月6日）は、上林暁作品の映画化を推進するムードをより一層高めようと企画し、四万十市が舞台の映画「あらうんど 四万十（カールニカーラン）」を手掛けた映画監督



の松田大佑さん 四万十市古津賀出身、神奈川県在住（39）に講演をいただき約40人の聴講者が来場しました。

講演では、上林作品を原作にした宇野重吉監督の映画「あやに愛（かな）しき」

の監督ならではの撮影技法や、また配役自身がこの作品を演ずる熱意の凄さなど、実際に撮影現場で起きた裏話を交えて紹介された。松田さん自身も上林暁作品のファンであると同時に、上林暁が意図して来たふるさと愛を表現できる立場にあることを意識して、暁の遺志を受け継ぐ活動をしていきたいと話されました。

林暁作品の熱烈なファンで、既にご自身の身体の中には上林暁が入っているという自己紹介をなされ、小説集「星を撒いた街」の選書にあたっての楽しいエピソードなども交え、上林文学の魅力を最大限にしたご講演をいただきました。

（この文面は、講師に承諾を得て内容を一部編集しています。）

小説集「星を撒いた街」の最初の作品は、上林の代表作のひとつである「花の精」にすることは最初から決めていて、人間が、大切なものを失っていくことが生きるということにも繋がっています。その時に感じた感情は、上林にとっては大切なもので、入院中の奥さんの退院の日や、上京したばかりの妹さんの生活苦に対する上林の思いが、すべて月見草に託されていたが、これを失っ

てしまった時に人間はどうするのか、どう自分の
気持を整えていくのかなどは、他の事にも応用が
利くと思われれます。

この作品は、誰が書いたということよりも、小
説として優れているのは凄いなと思ってもらえ
る作品です。

「花の精」は2019年の大学入試センター試
験にも採用されましたが、試験問題になったこと
の何が凄いかというと、ある時間、おそらく50万
人を超える受験者が一斉に、この問題を解くため
に上林の小説「花の精」を熱心に読むことです。
「花の精」が、試験問題に採用されたということ
は、今の若い人たちがこれを読み解こうとする
ことに意味があるからであり、大切な心の問題
を描いた内容には、今も昔もないから選ばれる
のだと思っています。

こうした凄い作品を1作目に持ってきて、その
あとは、少し気を静めてほしくて次は「和日庵」。
これは、島崎藤村が「破戒」という小説を書いた
時、まだ自費で出版をしなければならず、金策の
ために妻の実家の北海道に向かう途中の青森で、
2人のファンが居て、その内のひとりであった鳴
海要吉という人の晩年を描いた作品です。

その鳴海要吉が上林の近くに越して来て上林と
の付き合いが始まるのが物語で、この作品の特徴
は、登場人物がすべて実名にあることです。

そのあと「病める魂」、「晩春日記」これは奥さん
のことを書いた作品でも最高峰のものです。そこ
まで上り詰め、そのあとちよっとクールダウンさ
せ、最後には「星を撒いた街」で締めくくる編集。

この小説集の目的は、上林の魅力をのちの人に
伝えていくこと。上林の文学で多くを学んできた
者の一人として、それを伝えていくというのは恩
返しのように感じて、若い人たちに読んで欲しい
から、本の装丁も手に取ってもらえるような工夫
を凝らしている。その甲斐あって、実際に若い人
たちに迎えられ第3刷までいって品切れになつて
いるから、多分4刷、5刷までいくと思います。
あと、若い人たちには全集を読んで欲しいとお店
に来た人たちには勧めます。

全集は、筑摩書房から全部で
3回出版されたが、最初に出た
のが15巻本。その後改訂増補さ
れて19巻が出た。そのあとに決
定版が19巻で出て、この中には
その間に発見された高校時代の
文章なんかも含めて割とたくさ
ん収められました。私は増補決
定版を19巻揃えて読んできた。

〈中略〉

今回、全集を読むというタイトルにさせても
らったのもそうですが、上林全集を読むというこ
とが、僕の生活の中心になるという良さがあると
思う。

例えば、コロナによって仕事もうまくいかな
い。お客様の流れが止まってしまふ。かなりのス
トレスになる。どうしたら仕事が続けられるかと
迷ってしまう。そういう時に、僕は、毎日上林全
集を読んでいるやないかと、そう思うことで幸せ



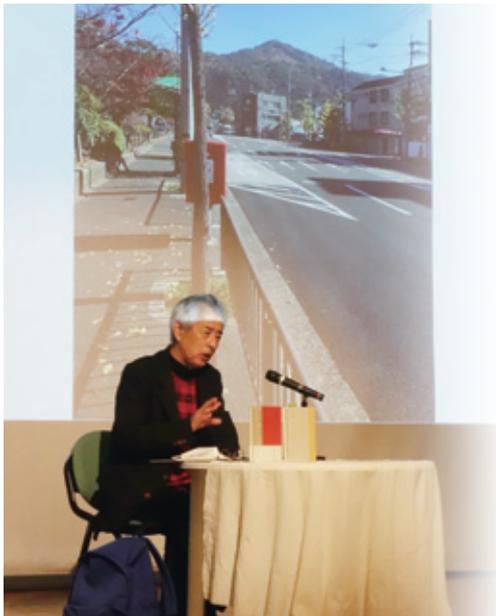
な気持ちになれる。どんな時でも、上林が居てく
れるやないかと。そういう意味で、僕にとつた
ら身体の中に上林が入っている。本当にそう思
います。

〈中略〉

上林の魅力。何でそこまで、身体に入るまで魅
力があるのかというと、これは、「武蔵野」とい
う教養文庫を読んでビビッときたその時の体験
はよく覚えています。ちよっと読んで置いて、
コーヒーを飲むとか少しづつ読む。身に沁みるよ
うな文章でした。「花の精」も入っていたし、色々
な作品を集めたもので、武蔵野を歩くのが基本に
なっているのですけれど、それが良かってその時
に身体に入ったと思っっています。それ以降は何を
読んでも以前は何も感じなかった作品までもが輝
きだして、そういうことが経験としてあり、僕に
とっては全部良いのです。

例えば、井伏鱒二とかは、上林は2回目に倒れ
たあとの作品が素晴らしいと書いています。言葉
も出なくなり、寝たきりになって、文学に集中せ
ざるを得なくなつた。自分が書かなくても、睦子
さんが口述筆記して、判らない言葉を文章にして
いく作業をする。それによって生まれた作品を井
伏鱒二は高く評価している。

魅力としては、奥様が病気になるって、家族にとつ
ては辛い出来事で、普通は書かないことでも、上
林はその看病も含めて、奥様の様子が経験でしか
書けないような文章がたくさんあります。読んで
いて辛い。だから、そればかり読むとこっちは



辛くなるということもありますけれど、この病妻物語というのは、上林文学として、彼が成し遂げた中では最高のものです。その時に養った見る力というのは、他のことにも影響していると思います。その時に獲得した心の奥を見つめるそういう視点。それは、散歩をする武蔵野の作品にも表れているし、上林本人もどこかに書いているけれど、書いたあとでその場所を歩き廻っても面白くない。何かもう腑抜けたような風景に見えるということを書いていた。それは精魂込めて書いて作品として仕上げたら、出かけて行って同じ風景を見ても、精魂が作品の方に行っているので、腑抜けたように見えるということですね。

上林自身は、中学2年生の時に文学に開眼した。その以前は、水彩画に興味を持っていた。それはのちに上林も書いていたが、自分は目の作家だと。見るということを大事にしてきた。上林は水彩画を見ることによって、その物を見る目を養って、したくはなかったらうけれども、

そういう奥様の病気によって心の目も鍛えられた。そういうことが言えると思います。

僕は、私小説というのが好きで、上林以外でも木山捷平であるとかも好きで、自分の身辺のことを書いた小説、事実を書くということですが、これは難しいことです。ある物を見てみな書くとしても、それぞれの人の思いはバラバラですから、事実を書くということの中には、創造力が入ってくると思っています。

例えば、「上野桜木町」という作品。寝ていてテレビを見てみると、川端康成の死を知るという作品ですけど、そのときにはそのままそこまで書くかなというような事を書いている。私小説の面白さというところだと思います。創作したところよりも真実を書いたところが自分でも納得がいくなという話もあるくらいで、私小説作家の書き方というのの一つの魅力があると思います。

〈中略〉

これからのことですが、この傑作小説集の続きを考えている最中です。「天草土産」、「手風琴は古びた」、これは童話みたいな作品。「北極星発見」、これは珊瑚礁を採りに行くような漁師の物語で、それを待っている奥様の話です。これも名作です。「鐵橋の別れ」とか「赤襦衣の屋臺」とかそういうのを入れたいと考えていますが、実際に動き出したら変わると思います。まだ、ゴーサインが出ていないけれども、出た時に取り掛かれるように準備しておくということも大事だと思います。

中河与一という作家が主宰した新科學的文藝という雑誌がありますが、この雑誌に書いている上林は特別なのです。上林自身もこの新科學的文藝に書く時は、気持ちをより込めて書いたと。それは他の同人の皆もおそらくそう思って書いているのが分かると思うのですよね。それは、雑誌の良さというのか、同じ思想を持っている人たちが集まってするのが当時の文芸雑誌ですから、この時も川端康成も書いているし、当時は人気の横光利一とか、新感覺派というグループでした。上林もこの雑誌に書くことに張り合いがあった。皆と張り合って名作を書いた。だから、「手風琴は古びた」とか「浅草のジョン・フォートランド氏」とかね。これはみな経験に基づいた私小説ではなく、ほとんど全てが創作というか自分で想像して書いた作品。ですから、上林もこの方向に進んでいけば、おそらくまた違ったすがた姿になっていたと思います。僕は、これらの新科學的文藝の作品を集めて1冊の本にしたい気持ちがあります。これは、上林も同じような気持ちで書いているから、そのまま本にしてもこれはいけると思います。

皆さんにお願いがあります。上林が中学の時に友だちと出していた「かきせ」という同人誌があるのですが、これがなかなか見つからない。それは、おそらくこの辺りか中村市あたりの友だちに渡して、その方が残している可能性しかない。そして、それは時間が経つにつれて見つかり難くなる。もし、見つかったらこれはもの凄いニュースです。

だから、知り合いの方とか居れば気に留めていただと思います。それで、出てきたら是非とも読み留めたいと思う雑誌です。それと、上林暁顕彰会の皆さんもそうですけれど、僕はこの傑作小説集の幾つか出したいということも言いましたけれど、大方あかつき館が上林没後40年を記念して出版しても良いと思います。上林暁文学館から遠く日本全国の上林ファンの方に届ける。或いは新しい読者も生まれるということ、それを最後にお願ひしたいと思います。

■2020年度 第3回 上林暁文学講座

「上林暁と将棋」

講師：大熊平城（上林暁の孫）



講演をする大熊平城氏

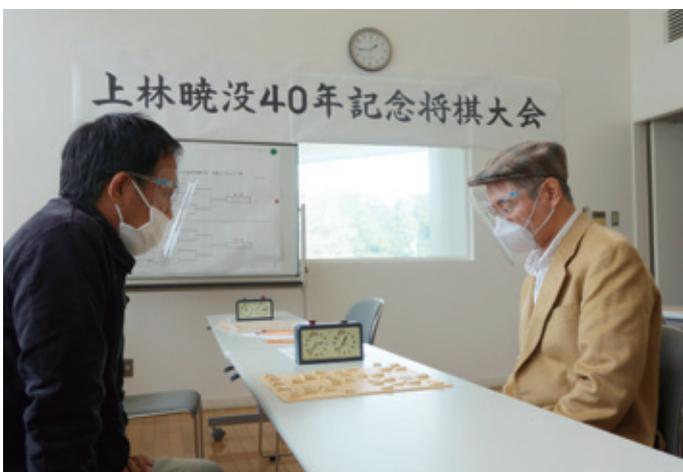
第3回の文学講座（11月29日）は、上林暁のお孫さんの大熊平城さんを迎え、「上林暁と将棋」という演題でご講演をいただきました。

ご講演前の自己紹介では、

「私は、東京杉並区の天沼に生れ、上林暁の隣の方に小学校を卒業するまで住んでいました。私が生まれた時には、既に暁は脳溢血で半身不随になっており、言葉を交わしたりすることも出来ませんでしたので、暁と将棋を指したこともありませんでした。私の将棋については、小学校高学年の時に突然興味を持ちまして、祖父（上林暁）がやっていたことは関係なしに自分で始めました。昨日の将棋大会（上林暁没40年記念将棋大会）では、最初は2連勝したのですが、その後、そのあと4連敗して入賞にも届かない結果となりました。やっぱり強い人がいるのだなあとお感しました。2012年12月に、上林暁の全集未収録・未発表の作品を集めた本「ツエッペリン飛行船と黙想」を出しました。その本の中に将棋の観戦記をどうしても入れたいということを入れました。いま、将棋と上林暁と両方に詳しいのは、遺族では私しかいませんので、本日は『上林暁と将棋』というテーマでお話をさせていただきます。」

講演内容は、出版された「ツエッペリン飛行船と黙想」に収録されている、大山・升田三番勝負第二局千日手差し直し局観戦記と、上林暁の将棋に関する行動を随筆集等で紹介されながら進められました。講演の途中で、聴衆者の皆

さんにこの中で将棋の分かる人はどのくらいお出でかと確認されたところ、残念ながら皆無でした。しかし、たまたまその会場には、昨日の将棋大会にお招きした森雞二九段が居合わせていましたので、スクリーンに映し出される将棋盤の指し手の映像を見ながら、講師との対話を交えた形式で進められました。この大山・升田の対戦について上林暁が観戦記を書いています。上林とは別の立場でこの対戦を見ていた人（当時記録係だった少年米長邦雄氏）の紹介などユーモアを交えてご講演をいただきました。



競技中の大熊平城氏（右側）

上林暁没40年記念事業

「花の精」High school 文学講座

講師：シエイク・愛仁香
シエイク・ソフィアン
(上林暁の曾孫)

2019年の大学センター試験に、上林暁の作品「花の精」が採用されたことをきっかけに、地元の学生に上林暁を知ってもらおうと企画した、大方高校の「おおがたソピア塾」と「上林暁没40年記念事業」による文学講座は、10月6日(火)ふるさと総合センターで開催され、講師には、上林暁の曾孫にあたるシエイク・愛仁香さんとシエイク・ソフィアンさんのお二人にご講演をいただきました。



シエイク・愛仁さん



シエイク・ソフィアンさん

ソフィアンさんからは、「藝術活動とその消費」と題して、哲学的な観点から「好きなもの」と「好きではないもの」の使い分けの大切さについてご講演をいただきました。



■上林暁没40年記念 将棋大会

11月28日(土) 大方あかつき館2階会議室で、幡多将棋連盟のご協力を得て16名の参加者のもと、初段以上をA級、初段未満をB級に分けたリーグ戦で開催されました。

大会には、上林暁文学講座の講師で見えられた、上林暁のお孫さんの大熊平城さんもB級でエントリーされました。

なお、競技中はコロナ感染症拡大予防のため、全員にフェイスシールドを着用していただきました。



競技中の皆さん

入賞された方々は次のとおりです。(敬称略)

- A級優勝 永野 博文 (四万十市)
- A級準優勝 野々下 好幸 (四万十市)
- B級優勝 桑原 広幸 (四万十市)
- B級準優勝 松田 大助 (四万十市)



入賞者の皆さん

■プロ棋士による 指導対局を開催

将棋大会のサブイベントとして、プロ棋士森 鶏二九段(四万十市ゆかりの将棋士)による小学生の将棋ファンを対象にした指導対局が行われました。11名の参加者でコロナ感染に配慮し

て1局の対戦相手を3名までとして、それぞれ森九段に挑みました。



◀対局の様子

森九段は、ハンデを付けるために、「駒落ち」というやり方で、飛び道具(飛車、角、香)を落とす四枚落ちや、さらに桂馬を落とした六枚落ちで臨まれ、子ども達が考えて指した一手に「いい手ですね」とか「よく勉強しているね」などアドバイスされ、なかにはどう指せば良かったか、駒を一手ごとに元に戻しながら指導もされていました。



- 対戦者は届け出順に次の皆さんです。(敬称略)
- | | | |
|----|----|-----------------|
| 11 | 山下 | 真ノ輔 (黒潮町立田ノ口小4) |
| 10 | 松本 | 晃也 (黒潮町立田ノ口小4) |
| 9 | 松本 | 悠生 (黒潮町立田ノ口小3) |
| 8 | 松本 | 蒼也 (黒潮町立田ノ口小2) |
| 7 | 小室 | 拓海 (黒潮町立入野小6) |
| 6 | 西嶋 | 志童 (黒潮町立入野小6) |
| 5 | 坂元 | 遙光 (黒潮町立入野小5) |
| 4 | 植野 | 太樹 (黒潮町立入野小5) |
| 3 | 高橋 | 凌海 (黒潮町立南郷小4) |
| 2 | 高橋 | 海結 (黒潮町立南郷小6) |
| 1 | 舛本 | 一翔 (須崎市立多ノ郷小3) |



指導対局に参加された皆さん

■第31回 あかつき賞

表彰入賞者決まる

小学1年の部

「おとうとのおせわ」

南郷小学校 石橋 愛海
(指導教員・曾根 潤子)

小学2年の部

「はじめのくぎぬき」

拳ノ川学校 梅澤 陽日
(指導教員・平林 美和子)

小学3年の部

「チョウを育てて」

佐賀小学校 辻 心々絆
(指導教員・門田 博人)

小学4年の部

「もちつき」

伊与喜小学校 生駒 賢太郎
(指導教員・武政 恵子)

小学5年の部

「巻き寿司作り」

田ノ口学校 川村 咲笑
(指導教員・曾根 健介)

小学6年の部

「ふるさとの海や川を守りたい」

南郷小学校 村上 潤弥
(指導教員・青木 純子)

中学3年の部

「どんな人にも自分の意思で

生きる権利がある」

佐賀中学校 明神 心嶺
(指導教員・杉本 理砂)

審査寸評

ていて、たいへん良かったと思います。

小学4年の部の「もちつき」は、おばあちゃんに誘われて、もちつきのお手伝いをした作品です。稲屋の中の空間描写や、手慣れたおばあちゃんの作業。さらには、自分自身がお餅を丸めた体験などが詳しく書かれていて、温かい環境で育っている様子が伝わってきました。

小学5年の部ですが、この学年では、良い作品が多くて選考に悩まされましたが、「あかつき賞」の原点に帰り、上林作品にみられる生活描写が多くみられた「巻き寿司づくり」としました。作者は、巻き寿司作りよりもゲームをしたかったと思うのですが、徐々に興味を持ち始め、作り方なども覚えられたようなので、来年はぜひ昆布巻きづくりに挑戦してください。

小学6年の部の「ふるさとの海や川を守りたい」は、ついに出版された長編物。と審査員一同をうならせた作品です。作者は大好きな魚釣りを通して、豊かな自然の大切さがしっかり学べており、黒潮町の豊かな自然を守りたいという作者の意図がすぐく伝わってきた秀作でした。

中学3年の部の「どんな人にも自分の意思で生きる権利がある」は、1冊の本を読んで先の大戦の理不尽さに憤りを感じ、作者自身も生きることの大切さを学ばれており、良い本にめぐり会えたと思います。「人間は、その時代に生かされるもの」であり「歴史に学べ」とも言われます。今度、是非、上林作品も読まれて更なる感動を発見していただければと思います。

小学1年の部の「おとうとのおせわ」は、幼い弟さんのお守りで展開される家族愛というのでしようか。弟さんの笑顔が何よりもうれしいと思う。その気持ちが、ひしひしと伝わってきました。小学2年の部の「はじめのくぎぬき」は、はじめにくぎぬきをしたときに見た周りの状況や道具の使い方などが、とてもよく表現されています。それと、作品の書き出しが「大みそかに近い日の朝」とありまして、読む人にもその時の情景が浮かびやすいところも良かったと思います。小学3年の部の「チョウを育てて」は、三種類のチョウの生育に関わったことで、生き物の命の大切さを実感されていることがわかりました。さらに人と人との関わり方でも新たな発見がなされ

